

氏名・（本籍地） 石 田 一 裕（北海道）
 学 位 の 種 類 博士（仏教学）
 学 位 記 の 番 号 甲第 69 号
 学 位 授 与 の 日 付 平成 22 年 3 月 15 日
 学 位 論 文 題 目 **ガンダーラ有部の研究—有部論書における西方諸師説を通じて—**
 論 文 審 査 委 員 主査 西 村 実 則
 副査 廣 澤 隆 之
 副査 司 馬 春 英

石 田 一 裕 氏 学位請求論文審査報告書

「ガンダーラ有部の研究—有部論書における西方諸師説を通じて—」

論文の内容の要旨

従来、西方師については資料がきわめて少ないため、あまり取り上げられることがなかった。しかしあえてそれを取り上げ、しかもこれ程の分量でまとめたのは初めてのことである。内容は次のようである。

第一章 ガンダーラ有部の諸学説—西方諸師説の確定—

西方諸師とは数多い説一切有部の論書のなかでもきわめて少ない、論書全体の総計でいえば五%にしか過ぎない用例である。その用例もすべてが「西方諸師」とははっきりあるわけではない。原語の *Pascatya* はさまざまな訳例がみられるからである。氏は六足・発智論「婆沙論」『俱舍論』におけるその用例を取り出し（くまなく）、検討をくわえている。とりわけ品類足論そのものを西方師の作になるものとする。また『入阿毘達磨論』における西方諸師説にも考察を加えた。ここには西方諸師説と強力なカシュミール有部との板ばさみがみられるという。しかしそれはよい学説を選択しようという批判的精神かもしれないとする。『婆沙論』になると、はっきり批判精神がみられるから、その前提かもしれないという。第一章の最後では大乘の唯識派における西方諸師を検討している。しかしはっきりその名称があるわけではないが、それに類似する説をとりあげている。

第二章ではガンダーラ有部の独自性—西方諸師の思想—について論じている。まず西方諸師思想の概観をしたあと、「婆沙論」という論書自体の性格を指摘する。それに続いて随眠の遍行・非遍行、彼同分の眼をめぐる争い、色界諸天の考察、衆心をめぐる論争、無記根説といった非常に細かい問題をとりあげる。これらは

いずれもカシュミール有部での思想体系ではそれほど重視され、思想体系の根幹にかかわる問題ではないが、氏にとってはきわめて大きなテーマとなっている。

本論文は現存する有部論書に散見する「西方諸師」つまりガンダーラ有部説を蒐集し、それら諸学説を考察して、ガンダーラ有部の特徴を明らかにしようと試みたものである。ガンダーラ有部説の考察については、それに対するカシュミール有部学説および瑜伽行派論書との比較を中心に行っている。ガンダーラ有部とみなすのは、有部論書において「西方諸師」や「西方沙門」の名で紹介される者たちである。称友や普光の『俱舍論』の注釈に従えば、「西方諸師」とはカシュミールより西に住む論師であり、それをガンダーラ有部と同定している。現存する論書からガンダーラ有部の学説を再構成しようとする場合には、この西方諸師と称する一群の論師たちの学説こそが、最も重要なものという。そこで彼らの学説を収集することで、現段階で指摘しうるすべてのガンダーラ有部を描きだしている。

こうした検討の結果、ガンダーラ有部のほうがカシュミール有部に比べ、古い学説を保持している可能性が高いという。換言すれば、ガンダーラ有部のほうが保守的な傾向を持ち、カシュミール有部のほうが進歩的な傾向をもつということになる。そうして前者は經に重きを置き、後者は論に重きを置くということである。この「經と論どちらに重きをおくか」ということが両者の最大の相違とする。そうしてこれは経量部ともかかわる問題というのが要旨である。

審査結果の要旨

説一切有部が大きな勢力を持ったのは中インド・マトウラー、カシュミール、ガンダーラとされる。このうち（マトウラーにはここではふれることがない）カシュミール有部が本拠地で、ガンダーラにも論師たちが論陣を張っていたのは従来から知られている点である。このガンダーラに展開した論師たちを西方師とみなし、かれらの学説を中心に研究したものである。ガンダーラは紀元前三世紀から後三世紀にかけてその地独特のガンダーラ語が使用され、初期の大乗經典もこの言語で書かれているため、ガンダーラにおける仏教の実態は今後一層注目されよう。

有部論書の中で西方師の説が最初に登場するのは、『品類足論』である。その成立をめぐる佐々木閑が書き換えをしたという花園大学の佐々木説を提示しているが、書き換えでなく、もともと古い伝承が二つ存在していたという新見解を示した。これは卓見であり、学会ですぐにでも即発表できるものである。その後の西方師の説は『婆沙論』『俱舍論』に認められ、それぞれのくだりを詳細に分析している。

後半では、西方師と唯識学派との関りを扱う。ただ唯識学派とはいっても扱われるテキストは『阿毘達磨集論』と『瑜伽論』の二つだけで、西方師と合致するのは前者で一つ、後者では二つのうち、一つだけであり、いささか心細い点も見受けられる。有部全体の教義体系と唯識学派のそれを対比した場合、唯識学派は圧倒的に有部のものを受け入れた。「五位百法」はあきらかに有部のものを前提にしているし、修行理論も名称を代えただけで採用されている。その場合の有部はカシュミール有部をいう。著者は西方師の説と唯識学派の主張と二、三の点で一致することから、唯識学派と西方師とは深い関りがあると提示する。これはかなり大胆な説であるが、きわめて大きなテーマであるという副査の見解もある。この方面の研究を著者は今後おおいに深めるテーマではあろう。

西方師と「外国師」との関りも著者は「傍論」というが、この論文では重要な問題の一つである。この点で外国師の説がでてくる『アビダルマデーパ』は重要であるが、氏はふれてない。今後、『デーパ』の記述を付け加えるべきであろう。

総評 論旨そのものは非常に明解で、論文の構構力もすぐれている。サンスクリットの読解力も十分あり、これからおおいに期待される。全国学会でも発表し、かれ自身も他の発表に質問したり、きわめて意欲的である。発表後、学会の理事長がかれの名は出さなかつ

たけれども、先ほどこのような発表があったと触れる一幕もあった。活発な人柄と柔軟性があり、これから大いに期待される人材である。さらに英語などの語学力をつければ、いっそう耀くであろう。課程博士に認定するに十分値するといえる。